

A-109 食品の嗜好に関する研究 第6報 嗜好因子とカラーテストについて
帝廣大谷短大生活科 山下 昭・池添 博彦

目的 日本人の食生活の内容は生活様式の変化と共に移り変り、こまごましている。年々新しい加工食品が市場に出廻り、従来の食品とは異った味、形態を有する食品が認められるが、この様な環境の中で、人々の食品に対する嗜好がどの様になつて来ているのかも調べてみたので報告する。

方法 18~20才の女子を対象として、今までの研究結果より、この年代の女子に比較的好まれる食品および嫌われる食品、各々40種を挙げ、その嗜好度および好、嫌の理由について調査した。対象は山崎勝弘氏の考案された色彩対比の選抜による性格分類法を使用し、カラーテストを行なつて区分した。

結果 カラーテストによる性格の区分は、小区分では81種に分れるが、対象人数が余り多くなりので大区分A(白黒の対比を好むもの)、B(白灰の対比を好むもの)、C(灰黒の対比を好むもの)の3区分にまとめた。対象の殆どがAなりしBでCは少なかった。好まれる食品における各々の尺度の割合はA群で(3):18.2%, (2):30.7%, (1):41.8%, (0):9.3%, B群で(3):22.7%, (2):27.8%, (1):36.6%, (0):12.7%であり、嫌われる食品における各々の尺度の割合はA群で(3):9.6%, (2):4.5%, (1):19.2%, (0):66.7%, B群で(3):11.4%, (2):8.4%, (1):22.4%, (0):57.8%であった。食物を好むあるいは嫌う理由としては味覚によるものが最も多く、全体の雰囲気によるもの、触感によるもの等も多かった。